# チャーリーの相対する二つの世界

鈴　木　麻衣子

物語の中で、チャーリーより先に手術を受けたアルジャーノンは、急激にＩＱが増し、また、それと同じくらい急激に退行が進んで死んでしまう。このアルジャーノンの死こそ、ニューヨークを後にするチャーリーの行く末を暗示させるものであろう。

しかし、２つの相対する人生を駆け抜けたチャーリーは、得るはずでなかった力を得、それを失うことにより、友情や愛情、人の優劣とは誰が決めるものでもないということを知ったのだ。長年チャーリーが憧れ続けた“Smart”という言葉が自分を形容する言葉になった時、友人を失い、自分の仕事に対して持っていた誇りを失っている。しかし、チャーリーは異性に対する感情を初めて感じているのもこの頃である。以前は優しさと賢さへの憧れの存在であったキニアン先生への想いが異性に対する感情へと変化している。全ての人から愛される為に、もっともっと賢くなりたいと願っていたチャーリーは、自分が変わってしまったことで友人を失うと、次は一人の女性に愛されようと、更に賢くなるよう取り組んでゆく。しかし、今度もまた、彼の知能が二人の間に、以前友人だと思っていた人々との間に出来たような溝を作ってしまうのだった。彼は、高い知能と引き換えにかけがえのないものを自分が失いかけていることを知り、実験がなんとくだらないものであったかを知るのであった。

これにより、チャーリーは、以前暗い部屋の鍵穴を通して見ていた明るい部屋には、眩しすぎて見えなかった、いやな面も沢山あったことを知ったのだった。また、手術後一時的に知能が変化し、また退行してゆく過程で、本当に大切なものが何であるのかを強く感じている。彼は、自分が科学の犠牲になったとは感じていない。実験は悲劇を生んだが、彼は二度と自分と同じ不幸をたどる人が出てこない限り科学に貢献したのである。

（指導教員　中村　敦志）